

- 7、日夏耿之介「明治大正の小説家」角川文庫
- 8、本多顯彰「夏目漱石論」英宝社
- 9、伊藤整編「夏目漱石研究」新潮社
- 10、松岡讓「漱石先生」岩波書店
- 11、伊藤整編「夏目漱石」近代文学鑑賞講座 角川書店
- 12、小林一郎「夏目漱石の書簡研究」国語と国文学
- 13、寺田寅彦「夏目漱石先生の思い出」筑摩
- 14、森田草平「夏目漱石」甲島書林
- 15、田村專一郎「漱石の早期作品に見えたる二傾向」国語と国文学

- 16、山本正秀「夏目漱石の文章」国語と国文学
- 17、藤川忠治「子規と漱石」国語と国文学
- 18、岩永胖、現代文学総説1 学燈社
- 19、小宮豊隆「漱石、寅彦、三重吉」角川書店

「方丈記」の構想と

その中心思想

江崎 鈴子

中世の無常の文学として知られている「方丈記」は、すでに多くの研究がなされているが、その特色として、「方丈記」は「自らの態度に不徹底を認め矛盾を恥じた告白を

したものである」(註一)とされる永積安明氏の消極説と、「無常の世をいかに生くべきかを身を以つて追求した人生記録である」(註二)といわれる西尾実氏の積極説がある。一つの文学作品に対してかかる見解の相違をみることは、その中に盛られている思想のとらえ方によつて生ずるものである。そこで私は、作品研究の根本的な段階である作品自体の分析、即ち、どういう素材でいかなる表現をしているかによつて、その構想を明らかにし、それを契機として「方丈記」の主題をつかみ、その中心思想を究明したいと思う。

「方丈記」に流れている思想を考察するためには、「方丈記」を研究することによつてのみ解決できるものではなく、作者鴨長明の他の作品の研究、又は長明の作家研究、更に、当時の社会情勢など、その他あらゆる方面からの研究が必要であることは明らかであるが、ここでは主として「方丈記」そのものについてだけみることにする。

「方丈記」の思想を探究して行くに当つて、長明の生きた当時の世相、生い立ちについて簡単に触れてみる。

長明は平安時代の末期、一一五三年に生まれた。藤原氏の勢力が傾いて保元の乱、平治の乱と相次いで戦乱が起り、世はまさに動乱の危機にあつた。人々は諸行無常を感じ、厭離穢土・欣求浄土の觀念から、厭世的風潮が高まつた。かかる世相に起つた安元の大火、治承の大つむじ風、

福原遷都、養和の飢饉等々の天変地異は、生長期にある長明の精神に大きな影を投げかけている。長明は鴨河合社鴨河合社の禰宜の次男として生れた。二十代において父に死別し、禰宜の職継承の望みを失い悲嘆したが、その反動で若い頃から親しんだ和漢の文学、特に和歌と管絃の道に身を打ち込んだ。和歌においては「鴨長明歌集」を父の死後まもなく出し、三十余歳にして千載集の中に一首おさめられた。その喜びに励まされ、一層和歌の道に精進し、四十六歳の頃宮中の和歌所の寄人として選ばれた。ところが亡き父のあとである禰宜の職を継ぐことができる機会が到来し喜んだが、同族からの思わぬ反対で、ついに若い頃から切望していた家業の地位を得ることができなかつた。又長明が願主として催した秘曲づくしの席上、彼が伝授を受けていなかった琵琶の秘曲を弾じたことから非難の聲がでた。これらの事件が幼い頃からの天変地異や不如意な人生に、平常から無常観を抱いていたことと相俟つて、長明の出家の直接原因となつた。五十二、三歳にして大原山に身をひそめ、その後まもなく日野の外山に方丈の庵を作り、そこに閑居して晩年を過した。方丈庵に移つて約四年の後（一一二二年）に「方丈記」を著わし、前後して歌論書である「無名抄」、仏教説話を集めた「発心集」を書いた。一一一六年「方丈記」著作後わずか四年にしてこの世を去つた。

「方丈記」本文の引用は「古典文学大系30」西尾実校注

使用。

註一 永積安明著「中世文学論」方丈記序論

註二 西尾実著「日本文芸史における中世的なもの」作品としての方丈記論

一

冒頭の部、「ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。淀みに浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまりたる例なし」と「世中にある人と栖まを象徴的に提起して、都の「人の住ひ」と「住む人」とのはかなさを具体的にとりあげている。ひき続きそれを「あさがほ」と「露」に比喻し、無常の必定を救うことのできない運命であるとして述べている。巧みな比喻と格調高い対句形式をもつてうたい出され、これを序としているのである。

都の生活のはかなさを暗示した作者は「予、ものの心を知れりしより」と実際の作者の体験に基づくものを取りあげる。

安元の大火は、客観的に冷静な描写で、その凄絶さを描き、都会生活では当然起こるべき災難であり、すべてのものははかなく焼け失せるものであることを認め、「人の営み、皆愚かなるなかに、さしも危ふき京中の家をつくるると、宝を費し、心を悩ます事は、すぐれてあぢきなくぞ侍

る」と感ずる。

治承の大つむじ風においては、自然の猛威に対してあまりにも微弱な人間にはどうするすべもない有様を述懐している。極めて詳細且つ確かな表現で、読者に事実をより事実として迫らせる。

作者は、同じ治承年間、世の中の明日とも頼みがたいことをまぎ／＼と感ずる福原遷都へ筆を転ずる。

遷都によつてまき起こつた人間社会の醜い一面を見逃さず、すみかと人の心が世の変動に乗じ変つて行くものであることを述べる。天災ばかりか人間の携わる治政に関するものであつても、全く予想外の事件に遭遇し、忽ちにさびれ行く旧都のはかない生活と、新都のいまだ成らざる現実の姿を無慈悲なまでに叙した。当時の都の者として、新興武士に対する見方を露骨に感ぜしめる点は、作者長明が旧社会に属するものであつたあらわれである。そして作者は世の不思議としての、大火、大つむじ風を写實的で客観的な觀察をして来たのに対し、この遷都に至つて可成り強い批判の眼を向けていることも注目すべきことである。

また養和の飢饉は「あさましき事」として取りあげた。

都の生活が田舎に礎をおくものであるが故に食糧不足にあえぐ姿を写しだしている。飢饉に伴う疫病の流行によつて都人の生に対する執着を強調し、都の惨状を酷烈に印象づけている。天変地異の体験の最後にとりあげられた元暦の

大地震は「そのさま、よのつねなら」ざるもので「すなわちは、人みなあちきなき事をのべて、いささか心の濁りもろすらぐかと思えしかど」も、月日が経つに従い「ことばにかけて言ひ出づる人だになし」と作者は、人々の仏教への無関心の実際で結んでいる。

以上、体験した「世の不思議」を要素として、長明が感ずることは「すべて世中のありにくく、我が身と栖との、はかなく、あだなる」と、都の生活のはかなさを序において暗示するところの結論に達した。そういう体験の生み出した長明の世界観は単なる詠嘆ではない。そこから長明は徹底した厭世観へ発展して行くのである。「心をなやます事は、あげて不可計」と世に住む人の精神的悩みを具體的にとりあげ、「いづれの所を占めて、いかなるわざをしてか、しばしもこの身を宿し、たまゆらも心を休むべき」と自己の内省へ眼を転ずるのである。

ここまでが「方丈記」の前半として考えられるのであるが、世の常ならぬこととして作者がみたことをたどつたことは、作者がこの先いかなる心境の展開を示すかの基本づけとなると思う。

以上の前半の部分の素材を整理し、その構想を考察すると次のようになると思う。

一、序 無常を感じているもの（都の「人の住ひ」と「住

む人」）

幸ノのたに文ヲ幸ヲを定訓し 招の懐状を醒烈に印象づけてゐる。天変地異の体験の最後にとりあげられた元暦の

二、無常の裏づけとなる作者の体験した事

イ 安元の大火

ロ 治承の大つむじ風

ハ 治承の福原遷都

ニ 養和の飢饉・疫病

ホ 元暦の大地震

三、無常の確認から生まれる厭世観

二

「方丈記」前半において都の生活を否定し去つた長明は、先ず我が生涯を簡単に振り返る。「しのぶかた／＼しげかりしかど」父方の祖母の家を去ることを余儀なくされ、三十余歳にして賀茂河原に小庵を設けた。長明にはそれまでの生活は「あられぬ世」であり「心をなやませる事」の連続であつた。「をり／＼のたがひぬ」に「おのづからみじかき運をさとり」五十になつて大原山に隱遁した。「捨てがたきよすがもな」く「身に官祿」もないことが「何に付けてか執を留めん」と遁世を促したのである。

大原山での隱遁生活五年にして三度目の転居、日野山の奥に方丈の庵を結んだ。「六十の露消えがたに及び」、住家を人間として生活できる最小限までにした「末葉の宿り」であり、長明はその庵を「いはば、旅人の一夜の宿をつくり、老（い）たる蚕の繭を営むがごとし」と表現しているが、それは長明自身の心境から出たものである。方丈庵の

一、序 無常を感じているもの（都の「人の住ひ」と「住む人」）

内外の有様を綿密に叙して、そこにみられるものは住家に対する欲望を極度に縮めたものである。そういう中にあつて、「阿彌陀の繪像」「普賢」「法花経」をおき、「和歌・管絃・往生要集ごときの抄物を入れ」た「皮籠三合をお」き、「琴・琵琶おの／＼一張をたつ」と自己の生活のよすがとするものを列挙していることは、ひたすらに己が生活を樂しむあらわれである。

庵のある「所のさま」、周囲の四季折々の情趣の描写は、仏徒としての遁世者の自然への愛着が窺知されるものがある。それにもかかわらず日常生活においては「若、念仏ものうく、読経まめならぬ時は、みづから休み、身づからおこたる。さまたぐる人もなく、また恥づべき人もなし」と何ら他の支配を許さない自分というものを打ちだしていく生活である。「歌を詠み」「琵琶をひく」自適の生活で、芸術三昧に生きる長明は仏徒らしき隱者の感が薄く、閑居生活を己れの心に従うまゝに生きようとするのである。

また山守の子を友としてあそび、うら／＼かな日は山野を跋渉し、静かな夜は月や猿の声に故人を忍び、曉の雨、山鳥、鹿、はては梟の声にも風情を養い「山中の景氣、折につけて、尽くる事なし」の感慨を持ち得る生活である。そして「いはむや、深く思ひ、深く知らむ人のためには、これにしも限るべからず」とより高次への表現において自己の境地を認識している。

扱て、作者長明は我が生涯を回顧し、閑居生活の有様、日常生活態度を敘して来たが、ここに至つて我が心境を述べる。「あからさまと思」つた「仮りの菴もやふふるさととな」つて、「ことの便りに」聞く都は、相変らず無常の世の中であるのに、長明には「たゞ仮りの菴のみ、のどけくしておそれなく、「一身をやどすに不足な」い住家があるのである。「身を知り、世を知れば、願はず、走らず。たゞしづかなるを望（み）」とし、憂へ無きをたのしみとす」る方丈庵の生活である。そして長明のすみかは「身の為にむすべり。人の為につくら」ないものである。

世間の人の本性の醜さを述べ、「人をなやまず、罪業なり。いかゞ他の力を借るべき」と独居生活における自我の道を行くのである。それらの閑居生活は「惣て、かやうの楽しみ」として語られ、それは「富める人に対していふにはあらず。只、わが身ひとつにとりて、むかし今とをなぞらふるばかりなり」と、あくまでも自我に根を下して生きる人間長明の強靱さがうかがえる。

諄々と自己の生き方を説いた作者は閑居生活の肯定をして、己れの心の安らかさと自由を悟つたのである。その閑居の気味は「住まずして誰かさとりむ」とまで敢然と言いつ放てるものである。

以上「方丈記」前半の厭世観と、長明前半生の人生不如意の厭世観の数々から脱出した閑居生活において、風雅を

楽しみ、自己を仏徒としての隠者の範疇に限定しないことによつて自分を見いだして来た作者長明は、再度自己というものを顧みる。仏の道から反省すると「草菴を愛するもとが」となり「閑寂に著するもさはり」となる。そしてこれは「要なき楽しみ」に過ぎない。ここに「住まずして誰かさたらん」の心境と相反する矛盾の壁につきあたつた。

「このことわりを思ひつゞけて、みづから心に問ひていはく、世を遁れて、山林にまじはるは、心を修めて道を行はむとなり。しかるを、汝、すがたは聖人にて、心は濁りに染めり」と、修道者としての自分を凝視し、厳しい自己批判を敢えてする。隠者としてあるまじき己れの態度に、仏徒としての長明が挑むのである。「若これ、貧賤の報のみづからなやまずか、はたまた安心のいたりて狂せるか」と推しつめて来る。が、そこには「心更に答ふる事なし。只、かたはらに舌根をやとひて、不請（の）阿彌陀仏、兩三遍申（し）てやみぬ」。この最後の、宗教に不徹底な遁者の姿は何から生まれたものであろうか。長明は人間として、より真実でありたいのである。仏徒としての批判を下しても依然として方丈の庵を愛し、閑居の気味を楽しみ続けて行こうとしている。そこに人間長明の素直な姿を見いだすのである。

以上前半を受ける後半の部分の素材を整理し、その構想をまとめてみると次のようになると思う。

意の厭世觀の數々から脱出した閑居生活において、風雅を

と前半を受ける後半の部分の素材を整理し、その構想をまとめてみると次のようになると思う。

四、我が生涯

イ 父方の祖母の家

ロ 三十にして鴨の河原に小庵を結ぶ

※ 長明前半生から生まれる厭世觀

ハ 五十にして大原山に出家幽居す

ニ 六十にして日野山奥に方丈庵を結ぶ

庵の有様

その所のさま

日常生活

五、我が心境

六、我が悟り

※ 厭世觀からの脱出

七、遁者としての自己批判

八、跋

三

「方丈記」に取り扱われている素材と構想を通して、作品「方丈記」をみて行くと、今一度「方丈記」を一文学作品として考えねばならぬことがある。「方丈記」が慶滋保胤の「池亭記」（本朝文粹卷十二所収）の影響を受けているということは夙に指摘されているところである。単なる素材、形式の上から見れば「方丈記」は模倣の文学とも言い兼ねない程、密接な関係が見られる。「方丈記」を知る上には「池亭記」が「方丈記」の中に如何に影響してい

るか、その内面関係を知る必要がある。

字句表現上著しい類似を持つものに、

棟を並べ葺を争へる、高き、いやしき、人の住ひ（方）

高家比門連堂、小屋隔壁接簷（池）

おのれが身、数ならずして、権門のかたはらに居るものは、深くよろこぶ事あれども、大きにたのしむに能はず。なげき切なるときも、声をあげて泣くことなし。進退やすからず、起居につけて、恐れをのくさま、たとへば、雀の鷹の巢に近づけるがごとし（方）

又近勢家、容散身者、屋雖破不得葺、垣雖壞不得築。有葉不能大開、口而咲、有哀不能高揚、声而哭。進退有懼、心神不安。猶鳥雀之近鷹鷂、交（池）

旅人の一夜の宿をつくり、老（い）たる蚕の繭を営むがごとし（方）

亦猶行人之造旅宿、老蚕之成繭、獨繭交（池）

等々のごとき酷似したものが多くみられ、また取り扱った対象物と構成の類似は、「方丈記」前半でとりあげた大雲地巽に対し、「池亭記」では、西京の荒庵を描き、大雲の家の火事、賀茂川の大水、北野のひでり等の災禍をとりあげている。長明が世の中の在りにくきことを述べたのに対し「池亭記」では東の京の様を描くことによつてそれを述べ、「方丈記」の後半、方丈庵の生活を述べているのに対し、作者保胤の閑居生活を述べている。その他相通ずると

ころが多く、跋のとりあつかい方をはじめ、全文の構成には同じ手法がみられる。

ところで、以上の類似点が「方丈記」の中でいかなる位置を占めているか考察するに、「池亭記」と「方丈記」の間には本質的な隔りをみいだす。「池亭記」に描かれているものは繁華な都会生活を否定し、つましやかな儒教的精神による閑居生活に安住している生活記録ともいべきである。そして「方丈記」にみる深刻な自己内省は全く感知できない。表現の字句対象としたものが酷似してはいるが、長明においてはその視角が自己凝視の礎になるものとしてとられておるのである。「池亭記」に形式その他の範をとつたことは事実であるが、決して模倣の文学作品ではない。長明は「池亭記」をふまえることによつて、「方丈記」の構想を論理的にし、自己の思想を明確に捉え、より具体的に表現できたのではなからうか。

結論

以上みてきたことによつて明らかかなように「方丈記」は巻頭から巻末まで整つた構想をもっている。形式から推して「枕草子」や「徒然草」の典型的な随筆とはおのずから異なる内容が生まれる。この作品の特殊性が、単なる随筆ではなく、一つの小論文ともいふべきものであることは否みがない事実である。長明はこの「方丈記」を書き出すに当たり、確とした思想をもつていたものである。その思想

を特異な手法で以つて表現して行つたと考えなければならぬ。

作品を分析しながらたどつてきた結果得た構想によつて主題、思想がいかなるものであるか考察してみる。

「方丈記」のはじめにおいては無常を感じているものにとりあげ、その無常の裏付けとして作者の体験した事柄を述べている。作者は体験した世の無常から厭世観を抱く。

後半では我が身の不如意な半生に厭世を感じ、前半でのべた厭世観と相俟つて出家遁世し、彼が讚美していた閑居生活へ行つたのである。その閑居生活において仏徒としてのきびしい自己批判を下した彼は、そこに仏教に徹しない我が身を認めるが、敢えてそれを是正しようとしなかつた。

「方丈記」の主眼は人間長明が自己をふりかえることによつて、より素直に生きようとしたところにあると思う。

この自己凝視こそ、人間の本质を探ろうとする精神の強さであり、生への追求である。即ち「方丈記」の主題は世の無常から自分というものを見いだすところにある。長明のもつ無常観が、長明を生きる人間として深めさせたのである。「方丈記」の構想を支え発展させたものは外ならぬ無常観である。「方丈記」の無常観は「徒然草」にみられる無常の敵である死が念々に迫つていることを認識せよと説く無常観や「平家物語」にみられる欣求浄土の仏教的無常観とは異なるものである。「方丈記」の無常は世の中の普遍

当たり、確とした思想をもつていたものである。その思想

的なものから生まれたものではなく、長明自身の体験から生まれたものである。それでこそ「方丈記」独特の思想をつくり出しているのである。

私は、はじめに永積氏と西尾氏の「方丈記」の受けとり方が消極説と積極説の対照的なものがあると云つたが、そのことについて少し触れてみる。

両氏はいずれも、作品の意味構造の上からみておられるが、その観点をやゝ異にされる。

永積氏は長明の生活史的照明をもつてそれを裏付けしておられる。永積氏の説によれば「方丈記」は社会の否定的側面を強調した一面的世界観に基調があり、現実一般を否定しているかのようにみえるが、それは現実の貴族文化を破壊するものへの否定であり、抗議である。彼はあくまで従来の貴族文化社会にひかれ、隠遁生活も徹底できなかった。そこに、最後において素直に自分の態度の不徹底を認め、矛盾を恥じた告白をなしたのである。そして現実の情勢を把える事ができなかったという限界づきの長明の世界観が「方丈記」の思想として全篇に流れており、それは否定的一面性のみをもつ詠嘆的無常観であると永積氏はみておられる。

西尾氏は「方丈記」の作品自体を主体に考察され、無常の世をいかに生くべきかを追求する積極的な人生記録であるといわれる。氏のみられる「方丈記」の詠嘆的無常観は

「方丈記」の無常は世の中の普遍

封建的変革期の渦中に生きた歴史的人間として、生の追求を敢行した著者の息吹きに直向させられるものであるといわれる。両氏の説はいずれも確かな論拠を持つものでありながら対照的な受けとめ方を示している。しかし永積氏の言われる世相の垂みを反映した消極的なものの中にも「方丈記」を書くことにおいて長明は自己を深化せしめたものであると私は認めたいのである。その点私が「方丈記」を私なりにたどつてきた結果、「方丈記」は世の無常から人間として素直に生きる自分をみいだす、長明の人間性のあるが、意図された構想のみから生まれたのではなく、和漢混濁体という力強い文体も効果を大ならしめたことを付記しておく。

「中学校一年生の作文に

あらわれた用字について」

高 木 恵 子

個性伸長の爲にも社会生活においても、極めて重要な地